

情報検索教育の文献調査 ーヨーロッパの情報検索コミュニティを対象としてー

白濱 隼人

情報検索はインターネット使用者が Google や Yahoo! などのインターネット企業の登場により利用者が増加している傾向にある。そのような情勢を踏まえて、2007 年に開催された (TLIR、2007) では情報検索の学習について初等教育レベルから改めて経験や意見の交換を行うことで、直面する情報検索教育の課題に取り組んでいた。一方で、情報検索教育の教育手法はまだ発展途上であり、それらを体系的にまとめることで、情報検索教育の実態を明らかにする余地がある。

情報検索に関するワークショップや研究論文などの文献を調査することにより、ヨーロッパにおける情報検索の実態を明らかにし、今後行うべき情報検索の教育方針を考察する。

情報検索教育において、以下の内容が留意すべき重要な項目であると考えられる。情報検索におけるカリキュラムでは、これまでの情報探索および情報検索に人間情報行動を追加することで情報検索のさらなる発展と学習を図る。情報検索における実験計画と評価では、学習時の不確実性を指導者やインターフェースが適切に制御することで学習効果を最大化する。情報検索に教育におけるプラットフォーム開発では、情報検索技術の研究・開発向けに統合フレームワークの有効性が示されており、学習者への効果は検証の余地がある。情報検索における理論教育と実装教育では、古典的な情報検索先に説明し、ウェブ情報検索を授業後半に指導する IR ファースト・アプローチが理論および実装教育において有効であることが示唆されている。

研究の限界として、積極的に情報検索教育の議論が盛んにおこなわれていたのは International Workshop on Teaching and Learning of Information Retrieval が行われていた 2007 年および 2008 年である。一方で、それ以降 Workshop などでの教育手法の共有は行われておらず、今回調査した内容でも一部未検証の項目については、教育効果の検証などの余地が考えられる。

(指導教員 上保秀夫)